

ロベルト・シューマン：交響曲第2番 ハ長調 作品61

この交響曲をはじめ珠玉のピアノ曲集、歌曲集のほとんどは、強力な反対を押し切って1840年に結婚した愛妻クララ（当代一のピアニスト 1819 - 1896）への愛と感謝の発露として創作された。1828年～1841年実に8回もの強烈な精神錯乱の発作に襲われ、盟友メンデルスゾーン（1809 - 1847）はライプツィヒ音楽院の作曲・ピアノ教授にシューマンを招聘するなど手を差し伸べていたが、1844年には鋭物恐怖症も悪化して発作中は記憶も失い、「天職」と誓った作曲は長期間全くできない状況に陥った。数年間の束の間の回復期に書かれた本曲は、天の啓示（第1楽章前奏 金管）に始まり、挑戦の決意と愛（第2楽章）、深い憂鬱（第3楽章）、再び天からの靈感を享けられるようになった喜びと希望（第4楽章）などを表現し、第4楽章後半ではベートーヴェンが最愛の人に贈ったとされる最後の歌曲『遙かなる恋人に寄す』（An die ferne Geliebte）が引用されている。献身的な妻クララがその引用を諒解した時の感動は察するに余りある。またシューマンは音楽評論を初めて確立した。メンデルスゾーンによるJ.S.バッハ再発見の意義、青年ブラームス（1833 - 1897）の才能、『幻想交響曲』で賛否両論を興したベルリオーズ（1803 - 1869）の真価を、世に広く認識させた見識と勇気の人である。

<第1楽章> Sostenuto assai - Allegro ma non troppo

神秘的な序奏では、金管による「ド」と「ソ」の2音だけで構成される天の啓示の如き動機が背景で何度も繰り返される。このシンプルな動機は、第2、第4楽章でも再現され、その度に天との繋がりが確認される。楽章本体は苦悩、挑戦を描き、決然としたコーダで締めくくる。

<第2楽章> スケルツォ Scherzo. Allegro vivace

「スケルツォ（冗談）」楽章が本来持っていた軽妙さは姿を消し、疾風怒濤と自問の激しい律動で始まる。そして本来なら優雅な室内楽的第1回目トリオで、スケルツォの軽妙さを現出させ意表を突く。戻った嵐の極限において、こんどは静謐で愛に満ちた第2回目トリオが突然姿を現わし、バッハのフーガの技法（愛と真理への導きを象徴）で恩寵を謳う。最後は律動が最速のテンポで戻り、トランペットとホルンが天の啓示の動機を高らかに奏する。世界中のほぼ全てのオーケストラのヴァイオリン入団試験で、この楽章冒頭が取り上げられる。

<第3楽章> Adagio espressivo

高揚のあとに襲う壮絶な憂鬱と孤独。心奥の苦悩と慟哭を音楽で吐露した本楽章を、シューマンはピアノでクララに弾いて聴かせ、終わると湧きあがる感情の涙に浸って、しばらくは何もできなくなったという。暗い道を歩むようなバッハ的対位法を用いた中間部は、ベートーヴェンの交響曲第7番第2楽章（葬送行進曲）のフーガが念頭に置かれ、死後の魂が最後の審判へと心細く歩む足音が響き、深い暗闇があたりを覆う。

<第4楽章> Allegro molto vivace

天からの靈感が戻ってきた奇跡的回復そして献身的なクララへの歓喜と感謝の音楽である。上昇音階の奔流のようなエネルギーが一旦鎮まると、天から響く愛のコラールが弦に始まり、やがて全宇宙が呼応するようにオーケストラが唱和する。暗かった第3楽章の主題が嬉々とした趣に変容して再現され、金管の「ド」と「ソ」の天の啓示の動機も、勝利と歓びのファンファーレとして何度も奏される。ベートーヴェンの歌曲『遙かなる恋人に寄す』がクララへ捧げる讚美歌のように繰り返されて歓喜は最高潮に達する。シューマンにしか出来ない純粋で真摯な喜びの世界が宣誓されている。

ピョートル・チャイコフスキー：ロココ風の主題による変奏曲

主題と7つの変奏及びコーダからなる。出世作のピアノ協奏曲第1番（1875）、バレエ『白鳥の湖』（1878）、交響曲第4番（1878）を次々と世に送り出す時期に書かれた。チャイコフスキー国際コンクールの課題曲にもなっている“チェロ独奏&管弦楽”の代表作のひとつである。

<ロココ風>

ヴェルサイユ宮殿に代表される17世紀～18世紀前半ロシアを含むヨーロッパ宮廷を席卷したロココ建築様式に由来する。壮麗で凝りに凝った装飾のイメージを抱かせがちな言葉であるが、チャイコフスキーの意図するところは、その時代に活躍したバッハ、ヘンデル、ハイドンらバロック音楽様式の先達への敬意・追憶（オマージュ）といったところか。すなわち、ふだんは19世紀後半の近代的大編成オーケストラ、斬新なソナタ形式や協奏曲形式を駆使するチャイコフスキーが、本曲に関しては、室内楽に近い小編成でバロック技法の「主題と変奏」を用い、シンプルに典雅に書き上げている。作曲者が敢えて「ロココ風」と銘打つ例外的作品と言えよう。

フェリックス・メンデルスゾーン：交響曲第5番 ニ長調『宗教改革』

『結婚行進曲』『ヴァイオリン協奏曲』で知られる早逝の天才メンデルスゾーンは、ゲーテ、シェークスピア、詩、古典、哲学に造詣深く、珠玉の交響曲群、オラトリオを産み出し指揮法を確立した。奇しくもJ.S.バッハの終の棲家の街ライプツィヒのゲバントハウス管弦楽団の指揮者に就任し、ライプツィヒ音楽院も創設（1843年、24歳）。盟友ロベルト・シューマンを音楽院の作曲・ピアノ科教授に招き、シューマンの交響曲第2番初演も指揮した。まさに「超人」と言えよう。とくに若干20歳のとき、死後80年

近く忘れられていた J.S.バッハの音楽を復興・普及させた事 (1829年ベルリンでマタイ受難曲の演奏を実現：ヘーゲル、ハイネらが列席) の功績は計り知れない。交響曲第5番は上述のバッハ研究の果実として1830年に書かれ、第3番『スコットランド』(1842年) や第4番『イタリア』(1833年) に先駆けている。

【ローマ・カトリックの音楽 vsドイツの新教(宗教改革/マルティン・ルター/プロテスタント)の音楽】

＜カトリック音楽＞ 4世紀以降教会内での器楽の使用はない。グレゴリオ聖歌は無伴奏で聖職者たちによってラテン語で歌われる。

＜プロテスタント音楽＞ 讚美歌がオルガン、器楽合奏の伴奏で、合唱団、会衆によって各国語で謳われる。

1517年マルティン・ルター(1483 - 1546)の『95か条の論題』が宗教改革の契機。カトリック/西方教会と袂を分かったドイツの新教徒たちはプロテスタントと呼ばれた。ルターは主要な讚美歌を多数作曲し、プロテスタント音楽の開祖として、ドイツのプロテスタント教会におけるバロック音楽の発展に大きな影響を及ぼした。1725年着任以降没するまでライプツィヒの聖トーマス教会において、讚美歌を主題とした珠玉の教会カンタータを200曲も書き上げたプロテスタント音楽の最高峰がJ.S.バッハ(1685 - 1750)である。ルター作曲の讚美歌『神は我がやぐら』は、バッハの教会カンタータ第80番の主題にして、本日のメンデルスゾーン交響曲第5番第4楽章の主題である。筆者は、第4楽章の総譜を眺めるときバッハの教会カンタータと見紛う心地がする。

第4楽章冒頭のフルートソロ

神は我が櫓 我が強き城 (0 2 5) (0 2 5) (0 2 5)
かみはわがやぐら わがつよきしーろ
A - men, a - - men.
ドレスデン・アーメン

【神秘的なドレスデン・アーメンの引用】 第1楽章 音列(025)を内包

ライプツィヒがあるザクセン州内教会典礼の3回のアーメンのうち、2、3回目がドレスデン・アーメン。

本曲の荘厳な第1楽章前奏に2回奏され、再現部直前にも3回目が出現する。

【20世紀の十二音技法、音列技法を約100年先取り。先駆者】

20世紀前半、シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンらが十二音技法、音列技法を唱え発展させた。しかしながら、モチーフ音列を、拡大・縮小、反行・逆行、尻取りなどで加工し重ね合わせていく概念は、バッハを頂点とするバロック音楽の対位法及びフーガ技法に他ならない。モチーフ音列の構成音の数が12個であろうが、5個であろうが、そして本曲の場合3個であろうが、核となるモチーフ音列が音楽のなかに変化(へんげ)しており、一聴して判らなくとも実は溢れかえっていること及びそれに気付くことの重要性が根底にあらう。すなわち神(或いは仏、絶対的存在)の遍在。

＜第1楽章＞ Andante - Allegro con fuoco

前奏：微光の祈りの場での思念とドレスデン・アーメン。

本編提示部：決然たる第1主題と、問いかけ/愛の第2主題。

本編中間部：模索の暗夜行路の中、遠くで導きのラッパが響く。

激烈な絶望的な嵐の中、奇跡のごとくドレスデン・アーメンが現れ再現部へ

本編再現部/コーダ：虚脱したようなP(ピアノ)での第1主題と第2主題の再現。

中間部の嵐がコーダで再現され、「続く感」満載で“第1エピソード”を閉じる。

＜第2楽章＞ Allegro vivace

典雅な3拍子の「メヌエット」のテンポをベートーヴェンが加速して軽妙にした「スケルツォ(冗談)」の楽章であり、楽園に遊ぶ喜びを表現している。教会の天井画で天使たちが木管楽器や堅琴を手にしているが、弦のピチカートは堅琴、クラリネットや中間部のオーボエのデュオは、羊たちを護る羊飼いで奏でられる。光景を愛でるメンデルスゾーンの肉声がチェロによって伝えられ、讚美歌のような静謐で軽妙なコーダで終える。

＜第3楽章＞ Andante

絶望の漆黒の闇。中間部での困苦と激しい問い掛けが頂点に達すると、更に濃い暗闇(再現部)が戻る。最後に第1楽章の第2主題(愛)が東の間想起されるが、漆黒の闇で低弦の単音(G)に収束。そのG音はフェルマータによって第4楽章のコラール(フルート)に受け継がれて、光と変わる。

＜第4楽章＞ Choral: Ein' feste Burg ist unser Gott, Andante con moto - Allegro vivace - Allegro maestoso

前奏：天使(木管)によるルターの讚美歌が会衆たち(弦)によって唱和されてゆく。

本編提示部：克服の喜び。讚美歌モチーフ、(025)モチーフ、チェロ等の作曲家肉声モチーフ(第2主題)

本編中間部：J.S.バッハの教会カンタータ形式による困苦の回想。すなわち短いモチーフがフーガなどで苦闘のごとく展開されるなか、モチーフの源である讚美歌が劇的に雄大に姿を現わす。

本編再現部：讚美歌の出現時点で再現部となり、間髪を入れず諸モチーフが歌いあげられる。

コーダ：喜びと興奮の頂点で、一転、奇跡のように静謐が訪れ天国の鐘が響き、最後にルターの讚美歌が天と地で壮麗に唱和される。